

モンゴメリー著・村岡花子訳「アンの愛情—赤毛のアン・シリーズ3—」新潮文庫、新潮社 2008年2月25日刊を読む

1. アンはやさしくリンド夫人の腕をはずすと、ぼうっとしたまま台所を横切り、広間をぬけて階段を元の自分の部屋へと上がって行った。窓辺にアンは目をうつろにみひらいたままひざまずいた。闇は濃く、あのく畑に雨が打ちつけていた。『お化けの森』は嵐に身をよじる大木の呻きにみち、空気はかなたの岸辺に打寄せる迅雷のような大波の砕ける音でふるえていた。そして、ギルバートは死にかけているのだ！
2. 聖書に黙示録の書があるように、だれの生涯にも黙示録がある。アンは嵐と暗黒の中で身も世もなく、寝もやらずすごしたその苦悩の夜、彼女の黙示録を読んだ。アンはギルバートを愛していた——今までずっと愛してきたのだ！それが今、わかった。アンはおのが右手を切り取りそれを投げ捨てることができないと同様、おのが生涯から苦痛をおぼえずにギルバートを捨て去れないことを知った。だが、この悟りはあまりに遅すぎたギルバートの臨終に共にいることによって、つらいながらも慰めを得るといふことさえ間に合わなかった。自分があんなに盲目になっていなかったら——あんなに愚かではなかったら——今、ギルバートのところへ行く幾権利があったのに。しかし、ギルバートはアンが自分を愛していることを知らずにしまうであろう——アンが愛していないと考えたまま、この世から去ってしまうであろう。おお、自分の前にひろがる空虚な、闇黒の年月！としてもその年月をすごしてはいかれない——いかれない！アンは窓辺にうずくまり、陽気な若々しい生涯で初めて、自分も死にたいと願った。もしもギルバートとが一言ものこさず、あるいはかたみとなるものなり伝言なりを一つものこさずにあたしから去ってしまうなら、自分は生きていられない。ギルバートなしではなにも価値はない。あたしはギルバートのものであり、ギルバートはあたしのものなのだ。苦痛の絶頂にあって、アンはそれに疑問の余地がなかった。ギルバートはクリスチン・スチュワートを愛してはいないのだ——これまで一度も愛したことはないのだ。自分をギルバートに結びつけている絆がどんなものかわからなかったあたしは、なんという馬鹿だったのだろう——ロイ・ガードナーに対しておぼえた思い上がった気まぐれを恋だと思ふなんて。罪をおかした場合と同様に、今自分の愚かさの償いを、しなくてはならないのだ。
3. リンド夫人とマリラは休む前にそっとアンの部屋の入口にしのんできたが、ひっそり静まった気配に、無言のまま、不安そうに首を振り合い、立ち去った。嵐は一晩じゅう荒れ狂ったが、夜明けには収まった。アンは闇の裾が妙なる光でふちどられるのを見た。まもなく、東の丘の頂きが朝日の初光でルビー色に染まった。雲はひとりで巻き上がって地平線に大きな、柔らかな、白い塊となり、空は青く銀色に輝いた。しずけさが世界にたちこめた。

[コメント]

モンゴメリー著・村岡花子訳「赤毛のアン」シリーズの第3巻「アンの愛情」ギルバートの危篤の知らせを聞き、最愛の人が誰かを知った主人公アンの心情がよくわかる純愛小説。是非、御一読を。

— 2015年4月27日林 明夫記 —